



●舟津さんは先代の後を引き継いでから、ひたすら夕張メロンづくりに情熱を傾けてきました。「生産者が集まれば、自然とメロンの話になる。みんな、いいものをつくりたい、という気持ちは同じです。夕張メロンの品質が安定しているのは、徹底した管理と、「おかしなものはつくれない」というプライドがあるからなんです」



●3月から5月までは、貯水槽の水を温めて苗に与えるという工夫も舟津さん独自のもの。「冷たい水をそのまま与えると根の成長が止まってしまいます。これも、自分の経験から学んだことです」



●うまく育たない実は見ただけですぐにわかる、と舟津さん。「気温が上がらず受粉に時間がかかると、形がいびつになってしまいます。ハウス栽培でも、天候の影響は受けるんですよ」

明日を語ろう! 北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



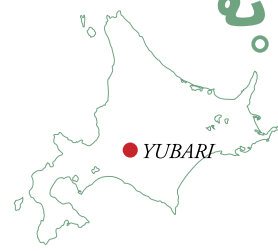
●舟津さんは、畝だけでなく、ハウス全体にも土を入れて少し高めています。こうした栽培方法は、舟津さんが取り組み始めたのも、夕張メロンの生産者それぞれが、こだわりのノウハウを持っている。

●地域全体で守る、全国ブランド

「ほかには負けたくない」という秘めた思い。いいものをコツコツとつくり続ける努力が夕張メロンを育む。

「夕張市」

舟津裕司さん(メロン農家)



●ハウス内ではミツバチがメロンの花の間を飛び回っています。夕張メロンは、40年以上にわたって、ミツバチによる自然交配で栽培されています。ミツバチの力を借りると、味も見た目も断然良くなる、と舟津さんは言います。



天候に左右されない
メロン栽培を模索

山間の平地にズラリと並ぶ、たくさんのビニールハウス。春の日射しを受けたハウスの中では、5月からの出荷に向けて、夕張メロンがすくすくと育っていました。

夕張メロン組合の組合長を務める舟津裕司さんは、メロン農家の2代目。22年前に先代の後を継いでから、こだわりのメロン栽培を続けてきました。「集荷場などで人のつくったメロンを見ては、「なんとか追いつきたい」と思っていました。天候に左右されず、安定していいものをつくるにはどうしたらいいか。そればかり考えていましたね」

試行錯誤して編み出した独自のノウハウ

舟津さんのハウスに入ると目につくのは、高く盛られた畝(うね)。土を盛ることで、水はけを良くし、メロンの根が弱るのを防いでいます。「食べ物がいづでもたくさんある状態は、メロンにとって好ましい環境ではないはず。人間だって同じですよ。排水を良くしてやると、メロンはどんどん根を張って、たくましくなるんです」

ハウス内では着果した雌花の付け根が少し膨らんできたところ。通常、1株に対して3個を残してあとは摘果するそうですが、摘み取り作業は舟津さんが一人で行っています。一つ一つ着果状況を見極めながら、素早く手で摘み取るのは、熟練と根気が必要な作業です。

「葉の一枚でも、取ればメロンのダメージになります。なるべく早い時期に不要なものを取ってやっつて、あとはそとしておく。それが僕の育て方です」。ほかにも、寒い時期

は貯水槽にためた水を温めてから与える工夫など、メロン栽培のこだわりは人一倍。その情熱を支えたのは「同じ生産者に認められたい」という思いでした。

消費者本位の生産体制が
ブランドを守る

夕張メロンは、今や日本全国に知られるブランド。厳重に管理された門外不出の種を使い、夕張市にある153戸の栽培農家が育てたメロンのなかから、さらに定の基準を満たしたものに与えられる称号です。

「安からう、悪からうでは、これだけの評価は得られません。誠実に、コツコツといいものをつくり続けること。それが何よ

り大切だと思っています」。生産者同士が良きライバルとして技術や品質を競い合う。そのことも、夕張メロン全体の底上げにつながり、と舟津さんは言います。

さらに、ブランドを守るために欠かせないことがある、と舟津さん。それは、常に消費者のニーズに応えるということ。「例えば出荷時期。天候などに左右されて、消費者が欲しいときに出荷できなければ、大きく信用を失うことになります。いままでも夕張メロンが愛され続けるには、生産者の都合ではなく、消費者の目線で生産に取り組まなければならない。そのためにも、いいものを安定してつくることが使命なんです」

舟津さんの愛情をたっぷり受けて、夕張メロンはすくすくと育ち、5月から8月までの間、全国の食卓を彩ります。